

【今日の説教から】

「あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者である」。前節まで、高らかに救いの素晴らしさが語られていたのに、急にまた逆戻りしたような表現です。前節はこうでした。

「あなたがたはまた、彼にあって、手によらない割礼、…キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである」

「あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。」

これは逆戻りではなく、大切なことの強調です。罪の中にあって、神様の前には死にもたとえられるような悲惨な状態だった。選民でもなく、異邦人だった。しかしキリストの割礼により、滅びゆく古き我に死に、キリストの贖いにより赦され、キリストと共に生きる者にして頂いたのです。

「もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされた…キリストなるかしらに、しっかりと着く…からだ全体は、…強められ結び合わされ、神に育てられて成長していく」 私たちは救いと命のかしら、王の王である主に結び合わされているのです。

皆様おはようございます。

早10月に入り、いよいよ朝晩が肌寒くなつてまいりました。その一方まだまだ日中は暑い陽気で着るものに苦労しますね。お元気にお過ごしでしたでしょうか。

コロサイ書2章も終わりに近づいてまいりました。

先週の箇所では、高らかに救いの宣言がこのようになされていました。

2:11 あなたがたはまた、彼にあって、手によらない割礼、すなわち、キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。

2:12 あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである。

しかし今日の箇所の冒頭ではいかがでしょうか。

2:13 あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。

パウロはもう一度繰り返して、私たちが罪の中にあり、かつコロサイの教会の信徒たちはユダヤ人でもなく割礼を受けない異邦の民であったことを述べます。

「バプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされた」と言いながら「あなたがたは、先には罪の中にあり」と続け、

「彼(キリスト)にあって、手によらない割礼、すなわち、キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てた」と一回言いながら、また「かつ肉の割礼がないままで死んでいた者である」と言い直すのは、行ったり来たりして不思議なのですが、そのくっきりとした対比を強調しているのだと思います。それはすなわち、「昔と今とは大違ひだ」という事なのです。

かつてはこうであったが、今は違う。全く違う恵みの中に入れられているという事を繰り返しパウロは語っているのです。そのようにして、ゆめゆめ逆戻りをすることがないようにと語っているのです。

2:13 あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。

2:14 神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。

先には罪の中におり、救いの系譜である選民でもなく、遠く隔たっていたあなたがた。しかし神様は「あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さ」いました。罪とは、誤った行いをも意味します。

「神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれ」ました。

「義人はいない、ひとりもいない。悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもいない。」(ローマ3章10-12節)、「あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである。」(1ペテロ2:25)との御言葉にありますように、またイエス様が十字架の上で「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と祈ってくださいましたように、私たちとはさまよい、何をしているのかもわからずに、罪を犯し、間違った行いを成し、「義人はいない、ひとりもいない。悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い

出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもいない。」という者となっています。

しかし、「神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれ」ました。

ここから引用 ウィリアム・バークレー注解 より

「拭いさられ」た。「拭い去る」にあたるギリシャ部は、動詞エクサレイフェインである。この語を理解するのは、神の驚くべき恵みを理解することである。古代の文書がしたためられた物質は、がまの一種である植物の髓でできた紙、パピルスか、動物の皮から作った、羊皮紙と呼ばれるものであった。どちらもかなり高価なので、無駄にできなかった。さて、古代のインクには、酸が含まれていなかった。だから紙の表面に書かれても、現代のインクが大抵そうであるように、紙の中まで浸透することはなかった。

ある学者は、ときどき紙を節約するために、すでに一度、字が書かれたことのあるパピルスと羊皮紙とかを用いた。そういうときは、スポンジで書いてあるものを拭った。古代では紙を拭うことができたのである。古代のインクは、放っておかれる限り消えることはなかった。しかし、インクは紙の表面だけのことなので、きれいに拭い去ることができた。それは、まるで何も書いたことがないかのように拭い去られた。

神は、その驚くべき恵みによって、わたしたちの罪の記録を完全に消してしまわれたので、わたしたちの罪の記録など、何もなかったかと思われるほどであった。それは痕跡さえも残らないほど完璧な方法で消し去られた。

(引用ここまで)

神様は塗りけし、拭い去ってくださいました。それは私たちを責めて不利に陥れる証書です。しかしその証書とは、まぎれもなく私たちが決まりやルール、法を破ることによってもたらされる負債の記録なのです。

黙示録 12:9-10 「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。

12:10 その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、「今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者は、投げ落された。」

黙示録 20:12 また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしてしまって、さばか

れた。

ヘブル 9:27 そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっているように、

9:28 キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救を与えられるのである。

このように、私たちにとっての罪状書きは、まことに正当で正しく、それは私たちの前に立ちはだかって私たちを責め抜くのですが、私たちはそれが事実であるからには、なんも反論することが出来ないです。しかし神様は、その不義による負債を、イエス様の十字架の贖いによってきれいにぬぐい取ってあたかも何も違反の記録のないものとして扱ってくださるのであります。

2:15 そして、もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。

そして、刑罰によって私たちを縛っていたところのすべての支配と権威の武装を神様は解除され、私たちを責め立て滅びに追いやろうと苦心画策していた者たちは敗戦の民としてさらし者となって勝利した將軍であり王であるイエス様の凱旋の行列に連なる見世物とされるという事が書かれています。

2:16 だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されなければならない。

2:17 これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある。

そうであるからして、私たちは割礼を受けながらも古き我にしがみつき、選民も道を誤りその救いから外れ、ただただイエス様による贖いによって救われる所以あり、何を食べるか何を飲むか、何を食べてはならなくてな何を飲まぬべきかとか、新月祭とか、安息日のタブーとか、律法学者たちは自分本位で律法の抜け穴を作るのに長けていました。

マルコ 7:1 さて、パリサイ人と、ある律法学者たちとが、エルサレムからきて、イエスのもとに集まった。

7:2 そして弟子たちのうちに、不浄な手、すなわち洗わない手で、パンを食べている者があるのを見た。

7:3 もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをかたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。

7:4 また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事をせず、なおそのほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受けついでかたく守っている事が、たくさんあった。

7:5 そこで、パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言伝えに従って歩まないで、不浄な手でパンを食べるのですか」。

7:6 イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている』。

7:7 人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』。

7:8 あなたがたは、神のいましめをさしあいて、人間の言伝えを固執している』。

7:9 また、言われた、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ。

7:10 モーセは言ったではないか、『父と母とを敬え』、また『父または母をののしる者は、必ず死に定められる』と。

7:11 それなのに、あなたがたは、もし人が父または母にむかって、あなたに差上げるはずのこのものはコルバン、すなわち、供え物ですと言えば、それでよいとして、

7:12 その人は父母に対して、もう何もしないで済むのだと言っている。

7:13 こうしてあなたがたは、自分たちが受けついだ言伝えによって、神の言を無にしている。また、このような事をしばしばおこなっている』。

しかしイエス様は「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」とおっしゃいました。

マルコ 2:16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。

2:17 イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

2:18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食をしていた。そこで人々がきて、イエスに言った、「ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとが断食をしているのに、あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」。

2:19 するとイエスは言われた、「婚礼の客は、花婿が一緒にいるのに、断食ができるであろうか。花婿と一緒にいる間は、断食はできない。

2:20 しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その日には断食をするであろう。

2:21 だれも、真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしない。もしそうすれば、新しいつぎは古い着物を引き破り、そして、破れがもっとひどくなる。

2:22 まだれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋をはり裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう。〔だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである〕」。

2:23 ある安息日に、イエスは麦畠の中をとおって行かれた。そのとき弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。

2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った、「いったい、彼らはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのですか」。

2:25 そこで彼らに言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが食物がなくて飢えたとき、ダビデが何をしたか、また読んだことがないのか」。

2:26 すなわち、大祭司アビアタルの時、神の家にはいって、祭司たちのほか食べてはならぬ供えのパンを、自分も食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。

2:27 また彼らに言われた、「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」。

2:28 それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」。

ルカ 13:11 そこに十八年間も病気の靈につかれ、かがんだままで、からだを伸ばすことの全くできない女がいた。

13:12 イエスはこの女を見て、呼びよせ、「女よ、あなたの病気はなおった」と言って、

13:13 手をその上に置かれた。すると立ちどころに、そのからだがまっすぐになり、そして神をたたえはじめた。

13:14 ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。

13:15 主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか」。

13:16 それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。

13:17 こう言われたので、イエスに反対していた人たちはみな恥じ入った。そして群衆はこぞって、イエスがなされたすべてのすばらしいみわざを見て喜んだ。

ルカ 14:1 ある安息日のこと、食事をするために、あるパリサイ派のかしらの家にはいって行かれたが、人々はイエスの様子をうかがっていた。

14:2 するとそこに、水腫をわざらっている人が、みまえにいた。

14:3 イエスは律法学者やパリサイ人たちにむかって言われた、「安息日に人をいやすのは、

正しいことかどうか」。

14:4 彼らは黙っていた。そこでイエスはその人に手を置いていやしてやり、そしてお帰しになった。

14:5 それから彼らに言われた、「あなたがたのうちで、自分のむすこか牛が井戸に落ち込んだなら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」。

14:6 彼らはこれに対して返す言葉がなかった。

14:7 客に招かれた者たちが上座を選んでいる様子をごらんになって、彼らに一つの譬を語られた。

14:8 「婚宴に招かれたときには、上座につくな。あるいは、あなたよりも身分の高い人が招かれているかも知れない。

14:9 その場合、あなたとその人とを招いた者がきて、『このかたに座を譲ってください』と言うであろう。そのとき、あなたは恥じ入って末座につくことになるであろう。

14:10 むしろ、招かれた場合には、末座に行ってすわりなさい。そうすれば、招いてくれた人がきて、『友よ、上座の方へお進みください』と言うであろう。そのとき、あなたは席を共にするみんなの前で、面目をほどこすことになるであろう。

14:11 おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

ルカ 6:1 ある安息日にイエスが麦畠の中をとおって行かれたとき、弟子たちが穂をつみ、手でもみながら食べていた。

6:2 すると、あるパリサイ人たちが言った、「あなたがたはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのか」。

6:3 そこでイエスが答えて言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。

6:4 すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。

6:5 また彼らに言われた、「人の子は安息日の主である」。

6:6 また、ほかの安息日に会堂にはいって教えておられたところ、そこに右手のなえた人がいた。

6:7 律法学者やパリサイ人たちは、イエスを訴える口実を見付けようと思って、安息日にいやされるかどうかをうかがっていた。

6:8 イエスは彼らの思っていることを知って、その手のなえた人に、「起きて、まん中に立ちなさい」と言われると、起き上がって立った。

6:9 そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたに聞くが、安息日に善を行ふのと惡を行ふのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。

6:10 そして彼ら一同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、その手は元どおりになった。

6:11 そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互に話し合いをはじめた。

6:12 このころ、イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた。

このようなお話が何度も何度も出てきます。主は律法をないがしろにしておられるのではなくて、完成させておられるのです。深い深い律法の本質を主は語られるのです。

マタイ 5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。

5:18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

詩篇 51:17 神の受けられるいにえは碎けた魂です。神よ、あなたは碎けた悔いた心をかろしめられません。

(新改訳)詩篇 51:17 神へのいにえは、碎かれた靈。碎かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

ルカ 18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。

18:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。

18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。

18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

18:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

18:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』

18:15 イエスにさわっていただこうとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて來た。

ところが、弟子たちがそれを見てしかった。

18:16 しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」

18:17 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。』

2:16 だから、あなたがたは、食物と飲み物につき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されなければならない。

2:17 これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある。

キリストが本体です。キリストが主です。キリストが中心で、キリストが焦点です。私たちは謙遜に、自らが中心で自らが一番大事という考え方を脇において、また陽炎のような移り行く影のようなものを追いかけないで、キリストを追い求めたいと願うのです。

2:18 あなたがたは、わざとらしい謙そんと天使礼拝とにおぼれている人々から、いろいろと悪評されなければならない。彼らは幻を見たことを重んじ、肉の思いによっていたずらに誇るだけで、

2:19 キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、からだ全体は、節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。

幻を見た。自分の徳はほかの人をはるかにしのいでいる。自分の理解は優れている。幻を見た、特別な靈力がある…。これらも人の誇りです。うぬぼれです。これもまた移り行く影に過ぎません。生まれながらに罪のもとにある肉の思いです。

「キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、からだ全体は、節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。」

このいのちの主に従う。この実体ある救いと恵みの本体につながる。つなぎ合わされる。これが私たちの成長と結実の鍵です。神様はそういう人を育ててくださるのです。

ガラテヤ 5:6 キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことではなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。

エペソ 4:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

4:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、

4:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。

4:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、

4:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。

4:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

1 ペテロ 2:19 人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。

2:20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行っていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。

2:21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

2:22 キリストは罪を犯したことなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

2:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

2:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

2:25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

ヤコブ 1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

1:13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。

1:14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。

1:15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

1:16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。

1:17 すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から來るのであって、光を造られた父から下るのでです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。

1:22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であつてはいけません。

1:23 みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。

1:24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようにであったかを忘れてしまします。

1:25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。

1:26 自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。

1:27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。

律法を知れば知るほど、自分の内面を知れば知るほど、自らが神様の標準を守ることが出来ず、その違反は日に日に積みあがっていくのを覚えます。しかし神様はその債務をキリストの身代わりの死の代価によって帳消しにしてくださり、証書を十字架にくぎ付けにしてくださいましたから、ありがとうございます。ただこの救いの主を誇りとして頼みとして生き続けます。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン